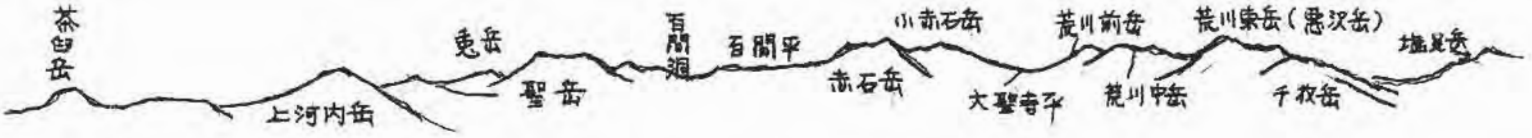
中川根ふる里通信

＝第74号＝

中川根ふる里通信
昭和61年4月20日創刊
編集・発行・連絡先
〒428-0313
静岡県榛原郡中川根町上長尾859-6
TEL 0547-56-0015 FAX 56-0020



春を待つ大井川源流 赤石山脈の嶺々

写真提供
寸又峡温泉
望月孝之さん

春が来ました。春は巣立ちの時・新しい出発の時!!

"暑さ寒さも彼岸まで"の諺を覆えす気象環境になってしまったのでしょうか。昨年の猛暑は十月過ぎまで続き、台風発生は十二月で終りでしたね。「今冬は暖冬」の気象庁長期予報は、おおむね外れ(年末～一月厳しい寒さ・二月は温か・三月は冬型気候)、いつまでも冷たさの残る三月末となっております。桜の便りもすっかり遅れておりますが、山桜のあるあたり、枯木が淡紅色に変り、里桜の蕾もふくらんで、花祭りのあたりには里も里山も桜の見頃になるでしょう。

春は里から山へ・奥山へと花も芽吹きものぼって行きます。その変化する様子は標高二〇〇m～一六〇〇mを有する中川根ならではの条件かも知れませんが、生命の源を発見するようで、見ていてとても幸せを感じます。春は黄色の花が目立ちます。庭ではサンシュユの木や水仙、里山や道路脇ではダンコウバイ。大札山山頂付近に群生するマンサクは、その気になって逢いに行かなければ見られませんが、ダンコウバイはちょうど花咲爺さんの魔法にかかったように、見事に花を咲かせます。キブシ、ニワトコ、クロモジ、アブラチャンと黄色の花が里から奥山へとのぼって行きます。

今年はスギが例年の十倍(様々な報道があってよく判らない)以上の花を付けた、との事。開花期には花粉をまきちらし花粉症の皆さんには、山・町を問わず、この上ない苦しみの春となっております。しかも温かかった二月上旬から飛びはじめ、寒い日は飛ばず、雨天・曇天も多々あって、いつにない長い期間花粉が舞っている様です。例年、三月中旬に山火事かと思うほどいっきに花粉を飛ばし、雨に流されて終るのですが、

この時期未だ山が茶色(スギの花と小枝の先が早春茶色に変わる現象)です。この先残った花が開くかも知れませんし、ヒノキ・アカマツを次々花が咲きます。私達は気候などに知恵で対応出来ますが、他の生物は自衛策をとらなければなりません。「植物も昨年の酷暑に対応して、危機感をつのらせ子孫を残す対策をしたのだ。」と聞きました。なるほど、スギも一杯花を付け実を残したい現象なのか。そういえば、みかんの種がいつになく多い。と感じませんか。それにしても、スギの木が多い――は実感ですが、スギは冬場、炭酸ガスを吸収して酸素を与えてくれる一番の担い手です。動物(人間)の生命線の一つです。アレルギーの皆さん上手に付きあって下さい。

三月十七日には町内三小学校(南部小・中央小・第一小)で、十八日には中川根中学校で、卒業証書授与式が行われました。三小学校あわせて五六人、中川根中では五八人の卒業生が、温かな母校の思い出を胸に、明るい希望に燃え、巣立って行きました。私も中央小学校と中川根中学校におよばれして、卒業生の晴舞台をこの目で見ることが出来ました。どちらも素晴しい式でした。送られる児童、生徒の感動はもちろん、送る側の先生方、保護者の皆さんも、力のこもった時間となったと思います。この子らの将来に幸多かれ、と祈ると共に、つらい世の中にさせてはいけないと思います。

中央小、卒業生が語って下さった詩を贈ります。

いつでも どんなときでも 隣には友だちがいた
苦しいときもあったけど 友だちがいたから 越えられた
いろんな話をした時には喧嘩もした
厳しいことも言い合った だけどそれは 友だちだから
自分は一人じゃない 友だちと協力して 六年間を過ごしてきた
みんなに出会えて 最高だった そんな優しさや
元気をくれた友だちへ 「ありがとう」
そんな素晴らしい十三人と 私たちは旅立ちます。

大井川の清流を考える＝第八回

―大井川を見つめて八十年

山田　部

二〇〇五年を迎える中で、昨年をふり返って見ると「災」の一字に表現されるように、シーズン早々から台風の襲来は三三号を数え、十の台風が本土に上陸するという記録を更新した。合せて十月二三日には新潟県中越地震の発生による暗いニュースに追い打ちをかけるように十二月末に至り、スマトラ島沖のマグニチュード九・〇という巨大地震とともに大津波の発生となり、死者二十万人を越すという大被害となり、人智を越えた自然の猛威に恐怖を覚え、科学技術の進歩が、自然を超えられるとした人間のおごりを反省させられます。

大井川の環境保全と、大河再生への道すじをつける歩みを進めるものの一人として、その思いを強く心から被災各地の犠牲者のご冥福と復興を祈ります。

前号までで明治期より大正・昭和に至る大井川の電源開発の歴史を紹介してまいりましたが、満州事変（昭和六年）から続く十五年戦争は、昭和二十年八月十五日の大平洋戦争の敗戦によって、〝国破れて山河あり〟の言葉どおりアメリカ占領下日本国の復興が始まりました。昭和二五年朝鮮動乱の突発による米軍特需によって、産業及び経済再生と食糧増産への道を歩み、これを機に国土開発計画法が立法され施行されるのであります。

私達は概念として母なる川大井川の昔と今についてはある程度の知識をもっています。江戸時代（徳川期）の紀の国屋文左衛門の井川山林・千頭山林からの木材の搬出や、大井川の水を利用した流送（川狩り）による運材の歴史を知り、明治期に入って大井川に通船が運航され、上・下流の交易が行われることになります。大正期に入っては駿府鉄道建設計画を前身として、大井川を遡上る金谷―千頭間を結ぶ大井川鉄道の建設が目論まれて、昭和六年十二月に全通し、流域の電源開発に拍車がかかったことは、前々号（四四号）に記述しましたが、大井川の姿を知ることと、その歴史を次の世代へ伝え、自然環境の保全と、大井川再生への行動の資として載きたいと思います。

点描（その五）

大井川の総合開発計画と利水を考察する

敗戦によって荒廃した国土の中で、国民の生活を豊かに復活させるためには、土地と資源とを総合的に開発して、都市と農村との適正な立地条件を整備する必要があった。昭和二五年の政府の国土総合開発法の線に沿って、静岡県は二六年に第一次県総合開発計画を発表し、次いで二七年に第二次・第三次・二九年に第四次・三二年に第五次と総合開発計画は着々とひろげられ進められていった。

この開発計画の主なねらいは、電源開発・食糧増産・国土保全の三本を柱として、水資源のエネルギーとしての電源開発や、灌漑用水等の多目的な開発を各部局の有機的な連絡のもとに、資源をもっとも合理的・有効的に利用しようとするものであった。

一、県の総合開発の推進について

この総合開発においては、天竜川上流の佐久間ダム・大井川上流の井川ダム等の開発は、これらの事業を代表するものであるが、流域市町村にとって、もっとも関係の深いものは、そのなかで大井川総合開発計画であり、またそれと関連を

もちつつ進められた大井川農業水利事業であった。

そのうち大井川電源開発については、上流井川から下流赤松まで六ヶ所の発電所と二ヶ所の貯水池（ダム）が建設されてその使用水量・最大出力等の概要は別表①に示すとおりです。

二、国営大井川農業水利事業について

国営（所管・農林省関東農政局）大井川農業水利事業の計画は、大井川デルタ地帯の一市十八町村を対象とした大井川の流水を灌漑用水として合理的に配水し、食糧の増産を目的として計画されたものであります。

この計画は、県の総合開発よりも早く樹立されて、昭和三二年十二月に着手された。そのち県総合開発の井川ダム電源開発の着手と進捗にしたがって、大井川の水量調節が可能になり、それと関連をもたせながら水利事業計画は、当初のものから三たび変更されて、その利用範囲は拡大されていくことになる。その事業経過は別表②に示すとおりです。

事業の経過と内容を説明すると、

(1) 当初における計画は、大井川両岸にある旧水門十二ヶ所を廃止して、上流に合口頭首工（取水口）を設けて右岸（榛原郡）の田地一、三七五ha と、左岸（志太郡）の田地五、〇〇一ha の合計六、三七六ha の用水を確保して、取水設備の維持管理の節減をはかることを目的とした。

(2) 昭和二六年の県の総合開発計画によって、大井川上流に井川ダムが建設され、電源開発事業の進捗によって大井川の水量も調整可能になり、灌漑期の取水量も増加したため、頭首工を島田市赤松地先から約五キロメートル上流の神座地先へ変更し受益面積も神座・金谷地区と新たに右岸地区の小笠郡の三地区の四、五〇〇ha を追加した。

(3) この事業も県総合開発事業に加わり、取水口を神座頭首工から川口発電所放水路に直結する。従って受益地までの導水幹線（約六、五Km）を電気事業者との共同事業区間として施行し、費用の配分を行う。

(4) 大井川右岸地域は前回計画では末端支配面積約四、〇〇〇ha までが国営施行であったが、除かれた末端事業に要する費用は地元農民に対して

別表① 大井川電源開発概要

関係発電所名	最大使用水量	最大時有効落差	最大出力	備考
井川	80 m³/S	92.5 m	62,000 KW	
奥泉	60	168.7	87,000	
大井川	72.35	112.73	68,200	
久野脇	78	48.6	32,000	
川口	90	75.3	58,000	
赤松	27.78	21.4	4,900	
関係貯水池名	**総貯水量**	**有効貯水量**	**利用水深**	**備考**
井川	150,000 千m³	125,000 千m³	45.0 m	貯水池
笹間	6,300	1,680	3.8	調整池

別表② 国営大井川農業水利事業の経過概要

計画	確定年月	計画の規模
①当初	昭和22年3月	合口頭首工・島田市赤松地先に新設 取水量・27.78m³/S 受益面積・6,376ha
②土地改良法に基き当初計画	昭和26年4月	合口頭首工・島田市神座地先に改める 取水量・38.5m³/S （神座・金谷・大井川右岸追加） 受益面積・10,876ha
③第一回変更	昭和33年6月	取入口・川口発電所放水口とする 取水量・39.0m³/S 受益面積・10,876ha
④第二回変更	昭和37年10月	取入口・同上 取水量・同上 受益面積・11,566ha （大井川右岸地域の 水田 180ha 畑 510ha）を追加
⑤第三回変更	昭和42年3月	取入口・同上 取水量・同上 受益面積・11,588ha

過重な負担になるところから、地元農民の要望によって、末端面積七〇〇haまで国営事業で行うことになり、また南部海岸畑地五一〇haと水田一八〇haの計六九〇haの受益面積を新たに追加した。

(5) 昭和四二年の第三回計画変更においては、本受益地のうち、農地転用（約一二四〇ha）を受益地から除いて、これに見合う地域（瀬戸川地域その他）を新規に加入するとともに、大井川右岸地域の国営路線約十六kmを増延して、末端支配面積を約五〇〇haまで国営施工としたものであります。

本事業は昭和二二年度に着工して、四三年度に完了する二二ヶ年にわたった一大事業であった。その受益面積は二、五八八ha（内畑一〇ha）であり、五市九町一村にわたっている。その関係市町村別の受益面積は別表③に示すとおりです。

別表③　関係市町村別受益面積

左岸地区		右岸地区	
市町村	受益面積	市町村	受益面積
島田市	1,128 ha（内神座 55 ha）	菊川町	800 ha
藤枝市	1,490（内瀬戸川 587）	小笠町	522
焼津市	1,760（内瀬戸川 376）	大浜町	673（内畑 196）
大井川町	1,174	浜岡町	416（内畑 196）
吉田町	748	城東村	364
榛原町	195	大須賀町	541（内畑 118）
金谷町	438	掛川市	974
		袋井市	365

〔註〕昭和26年、本事業に小笠用水が加えられることになって、榛原郡吉田町・榛原町・金谷町地域は、小笠地区と区別するために、便宜的に左岸地区と一括して名称する。

別表④　国営大井川農業水利事業の用水路

水路名	支配面積	通水量	延長 総延長	延長 開渠	延長 その他	構造	勾配	主要構造物	備考
① 大井川幹線	11,588 ha	39.00 m³/s	2,301.9 m	— m	2,301.9 m	コンクリート巻立 標準馬蹄型 R＝2.4m H＝4.3m	1:1,500	隧道	共用工事
② 大井川左岸幹線	6,440	27.78	1,526.0	—	1,526.0	コンクリート及コンクリートブロック舗装梯型 玉石練積補装	1:900 ～1:1,200	〃	〃
③ 赤松幹線	6,440	27.78	6,056.0	5,369.0	687.0	玉石練積及コンクリート護岸	1:600 ～1:1,000	隧道及開渠	一部共用工事
④ 向谷幹線	278	5.65	5,060.0	4,198.0	862.0	玉石練積コンクリート並コンクリートブロック舗装函型	1:500 ～1:1,000	開渠	
⑤ 白岩寺幹線	183	1.34	1,159.0	1,023.0	136.0	コンクリート舗装梯型	1:600 ～1:1,000	〃	
⑥ 芝祖幹線	307	1.52	2,598.0	2,416.0	182.0	コンクリート並コンクリートブロック舗装梯型	1:400 ～1:500	〃	
⑦ 志太幹線	1,479	7.14	7,893.0	7,415.0	478.0	〃	1:500 ～1:1,000	〃	
⑧ 榛原幹線	1,341	7.78	7,986.0	5,988.0	1,998.0	コンクリート及コンクリートブロック玉石練積舗装ウエル中詰ヒューム管 1,650mm 2連	1:200 ～1:1,800	開渠及伏越	
⑨ 小笠幹線	5,093	10.22	7,526.0	116.5	7,409.5	鉄筋コンクリート矩型	1:1,000 ～1:1,500	水路橋 隧道及伏越	
⑩ 菊川幹線	4,655	6.50	4,039.8	122.7	3,917.1	〃 及函型	1:500	隧道及伏越	
⑪ 菊川右岸幹線	1,978	2.964	15,757.4	2,327.1	13,430.3	鉄筋コンクリート函型	1:500 ～1:2,500	〃	
⑫ 菊川左岸幹線	1,458	2.15	13,815.7	704.9	13,110.8	〃	1:600 ～1:1,500	〃	
⑬ 掛川幹線	1,219	1.804	10,553.2	1,816.4	8,736.8	〃	1:1,100 ～1:1,500	〃	

総事業費は、
国営事業費　五四億二、七〇〇万円、
関連事業費　三八億二、二六〇万円
（県営二七億六八二〇万円
国体営一〇億五四三〇万円）
合計　九二億四、九六二〇万円
である。この水利事業の幹線（用水路）は十三線に分けられていて、それら各幹線の支配面積、通水量、延長、構造等は別表④を参照して下さい。

この事業の基点が島田市内にあるため、十三線のほぼ半ばの幹線が島田市と直接関連をもっている。

この水利事業によって、従来からの大井川両岸に設けられていた五ケ所の用水取入口（左岸―神座用水・向谷水門・加藤用水・木屋水門、五百間用水・善左ヱ門用水・上泉水門・相川用水・中島用水・馬渕用水・右岸―上井用水・谷口用水・大柳用水・川尻用水）は廃止になり、沿岸市町村では、従来の用水取入口の堰場の補修や割当作業も一切必要がなくなった。従来の取水口は、その工法が日本在来の川倉式によっていたため、出水ごとに流失・破損したり、また本川の流れの位置が変化するたびに、その補修改築・水路の浚渫（しゅんせつ）など毎年莫大な資材と労力を要したものであった。

→川口発電所（写真奥）の放水口から利水する大井川農業用水と、広域水道の取水口（手前）伊久美川※大井川からの直接（川西）取水口は写真左手20mに設置されているが、予想を上まわる河床低下で、現在使用されていないという。
※国営牧之原農業用水は、川口発電所放水口から直接導水管（サイホン）で対岸（金谷町）に渡っている。この水利用は長島ダム直接事業となっていて→水利権更新期は「まさに今」平成十七年三月二日!!

①

②

③

写真①大井川用水の神座分水工の流入口
②大井川用水の記念碑・記念碑には、当時の農林大臣西村直巳氏の名がある。
③大井川用水神座分水工を滔々と流れる大井川の水写真奥手に、左岸・右岸の取入口がある

(三、余録

(1)、大井川の総合開発は、戦後の復興と食糧増産を目的として、電源開発への利水と、農業用水の利水であった。史実を逆上って行くと、大井川は明治維新後の文明開化の波に乗って水力発電や農業用水の導入が考えられていた。

かつて大井川の水を小笠平野に導入することは、父子相伝の大願として、明治三二年、掛川の先人・山崎千三郎（本川根町の智者山に植林をした人）が、自費を投じて千頭から小笠平野へ導水することを考えた。

当時小夜の中山の久延寺を事務所として、大学院工学博士小山友直によって実地測量を行い、工事計画は出来上っ

④

写真④大井川用水の小笠幹線・神座―五和間の水路橋・戦後間もない建設の為に老朽化といちじるしい河床の低下の為、50m位下流に新しい水路橋の架替工事が進められている。

⑤

写真⑤大井川用水小笠幹線菊川頭首工全景。国土交通省一級河川菊川は、大井川の水が加わり、豊かな流れに変わって、遠州灘に注いでいる。

たところで山崎が急逝し、計画は実行に移されることなく中絶した。

時移り、昭和十八年・二十年・二一年の三年にわたる干魃が続き、小笠郡町村会がこの問題を取り上げ、三年に小笠用水施設期成同盟会を発足させたが、水利権問題で難航して進まなかった。

昭和二二年農林省は大井川左岸（志太・榛原）用水に着手し、続いて右岸（小笠郡側）を含めて、国営の農業用水利が県知事（小林武治）の左岸と右岸との覚書により、最初の大井川農業水利事業がスタートし、昭和二五年の国土開発法施行の中で、大井川総合開発計画となり、電源開発が進められ、今日の大井川の水利用の成果（電源開発と農業水利及び広域水道）は認めるとしても、これに反比例して山・川・海の自然環境を破壊した責任は誰が負うのか。

――山が死に・川が死に・海が死んだら、次の世代を背負う若者は何んと言い、如何にして自分に処すだろうか？――

（ロ）大井川農業用水には取水の送水路の建設には色々のエピソードがありますが、私に与えられたスペースに余裕があれば又、紹介します。

次回は、大井川総合開発計画の中で、川口発電所の建設にかかる過去と現在を記述します。

――ダムの功罪と堆砂による涸れ川について――

なつがいいな

なつがいいな
かぶとむしや
せみがいるから
ぼくは
なつがいいとおもう
はやくこないかなあ

ゆきひろ（五歳）

はやくぬくとくならんかなあ
むしがたくさんでてくるら
そしたら
むしをつかまーてあそべるもの
でも
しんだらかわいそうだな
とっても
またにがしてやれば
いいだよな

ひではる（五歳）

出版物紹介

中川根の子ども達のお母さん、『章子先生』が『子どものことば絵本』を出版されました。すてきな絵本誕生です。

発売元：静岡新聞社

子どものことば絵本　採録・絵　堀畑章子

堀畑さんからのメッセージ

保育の楽しさを感じた四十代、子どものことばに絵を添えることに興味をもちました。そして私なりの試行で母子どものことば絵本を作りました。

誰に見せるということでもなく、ささやかな自己満足の行為で何冊か作りました。昭和五十三年、読売新聞社の第一回手づくり絵本コンテストの募集がありました。私はこの機会に自分の作品を世に問うてみたいと思い応募しました。その時、私が応募した絵本の題名は、

―なつがいいな―こどものことば絵本―でした。

忘れもしません。同年十二月十三日、読売新聞社の九階大会議室において奨励賞をいただきました。応募二五五八点の中で二十位に入選したことが、大きな喜びでした。審査員の安野光雄先生から次のような評価をいただきました。

「絵はたいしたことはありません。子どものことばが光っております。その子どものことばに賞を付けました。」ということでした。

そして今、三十年近く経過した子どものことばを改めて読み返してみますと、子どものことばは全く色あせておりません。どの子のことばとばにも、生まれてから今までに獲得したその子なりの体験・知恵・喜び・夢がいっぱいつまっているのです。

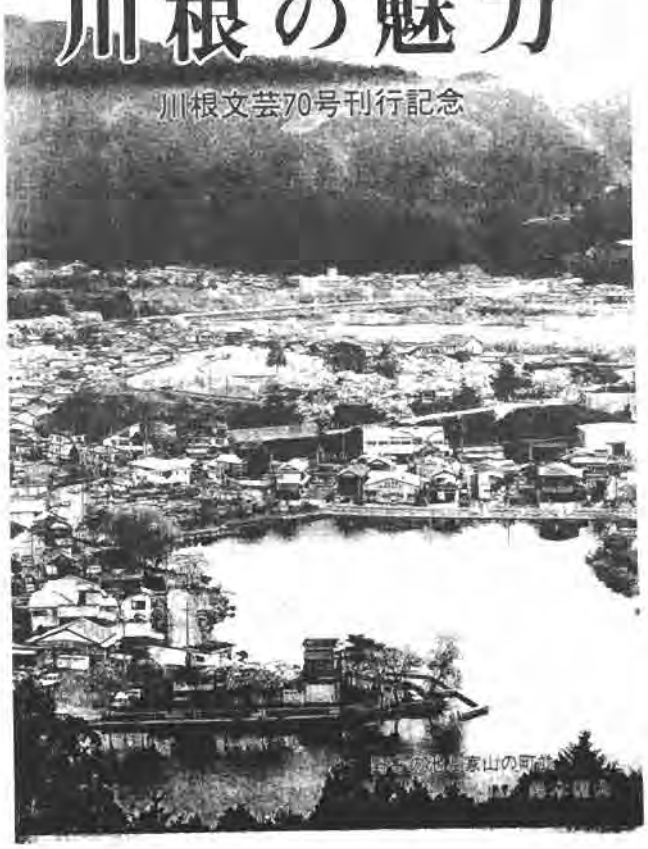
私は再び子どものことばに光を当ててみたいと思いたち、私の師と仰ぎ尊敬する今井和子先生に気持ちを伝えましたところ、温かいお励まし、多くのご助言をいただき光を当てることといたしました。

なつがいいな―子どものことば絵本
平成17年2月10日初版発行
＊著者・発行者／堀畑章子
〒428-0313
静岡県榛原郡中川根町下泉974
＊制作／イーストプロモーション
＊発売元／静岡新聞社
〒422-8033
静岡市登呂3-1-1
TEL 054-284-1666
＊印刷・製本／図書印刷
＊ISBN4-7838-9621-6-C8795

私の出会った多くの子供たちに感謝の気持ちを込めて、―なつがいいな―子どものことば絵本―を出版いたします。編集室より。子どものことばから多くの〈パワー〉をいただける本です。是非あなたの手元にどうぞ。

定価　八四〇円（税込）

もう一つ　出版物紹介



川根ペンクラブよりお知らせ

川根の良さを再発見しようという想いで、この度特集号「川根の魅力」＝川根文芸70号刊行記念＝を発行しました。会員以外の特別寄稿もいただき『川根を愛する心』満載の文芸誌となりました。

是非大勢の方にお読みいただきたいと思います。

又、平成十二年十月三十日に発行した特集号「川根の風景」＝20世紀の三川根＝もまだ残りが少々ございます。これは戦争の思い出や戦後五十年の歩みなど綴ったものです。ご希望の方は左記までご連絡下さい。すぐお送りさせていただきます。

一部　一、五〇〇円＋送料二〇〇円
二部　三、〇〇〇円＋送料二九〇円　となります。現金書留でお願いします。

取扱先、
（申込先）〒428-0305
静岡県榛原郡中川根町地名三九四
川根ペンクラブ中川根支部長　中原すま子
FAX、〇五四七－五六－〇五〇三

〝川根の魅力〟発刊について、〝会長　鈴木利夫

私たちは、この川根の地に共に生き、お互い助け合い、励ましあって生き抜こうと、川根ペンクラブを結成した。文芸誌〝川根文芸〟を発行することにより、川根の文化遺産の整備と掘りおこし、そして香り高い文化を創造していきたいと考えたのであります。

さて、私たちの先祖は、縄文時代より、大井川の流域に住み、狩りをしたり、山で木を伐り、畑を起こして住みつき、今日の集落の基礎を造ったのです。以後、厳しい自然の制約を受けながら、川根地域固有の生活や、慣習、信仰、民俗伝承などを重ねて来ました。

最近の過疎現象は、山峡にある小集落の離散を招きつつあり、人口減は驚くほど急速に進行している。これは、誠に残念であり、なんとかして食い止めることはできないものかと思うのは、私ひとりではない筈です。

川根地域には、地域の自然や生活すべてに関わる集落の歩み、衣食住、産業、交通、交易、信仰、民俗芸能、口頭伝承等々、貴重な文化遺産があります。これらを記録に残さないと、消失してしまう恐れもあり、それ故に、現在川根に住んでいる私たちの責任は、非常に重大であると思います。

川根の地から都市へ嫁いだ知人が里帰りした時、「空気がおいしい」「緑が癒される」「谷川の水がうまい」等々連発するのを見ると、改めてこの地に住んでよかったなあ！と、つくづく幸せを痛感する昨今である。

また三町外から見える人達の誰もが「川根の人は心やさしく親切な人が多い。」と言う。これも川根の人の純朴さであり、他に誇っていいことだ。

川根は四季すべてが美しい。春から初夏にかけての緑、特に山桜を中心にした春の風景は、春紅葉（はるもみじ）と言って人々は感嘆の声を発する。

夏の木陰の涼しさ、谷川のうまい水、山野草、セミ時雨、土の色と匂い。

秋は紅葉、山桜、モミジ、ナラ、シデ等々独特の色彩で人々の目を楽しませてくれる。

寺田寅彦の随筆集の中に、ある時、寅彦は六歳の親類の子に、「東京と国と、どっちがいい。」と聞いたところ、「お国の方がいい。川にえびがいるから。」と、答えたそうだ。国とは、国家ではなく、ふるさとのことだ。えびという言葉の中に、えびの住む清冽な小川、それに緑の影を落とす森や山、河畔に咲きみだれる草の花もひっくるまっているのだ。

芸術文化に行政の粋はないと言う、勿論のことだ。昨年は、市町村合併問題でぎくしゃくしたけれども、私たちは、これにへこたれてはならない。自然は最高の教師と言う。私たちは、この自然の中で感性を育ててもらっているのだ。こんなすばらしい川根の里、魅力いっぱいの川根の良さも見つめ直し、いつまでも守り育てていきたいものである。

―抜粋―

中川根の屋号　その二

73号にて、一般住民が姓を名乗ることが許されるまで、その家を呼ぶのに屋号で呼んでいた。屋号や地名を姓とした家はほとんど無く、中川根の特徴として「○○衛門」が圧倒的に多い。その理由を稿く事は一概には言えないが、古い時代に衛門府が置かれた事と、中川根を含む駿河・遠州の山間部には、源平の合戦ごろから、関ヶ原の合戦ごろまで、幾多の内乱があり、その敗者がこちらへ逃げ込んできた事、などをお知らせしました。

一方、これとは別に、原住民的な百姓の血縁ないし同族とも思われるブロック、或は、時を同じゅうして移り住んだ、主従の一党かと推定される一群、そして、それらの殆んどは、宗(惣)家ないしは主家を中心にして、これを[ほんや][おおや][わで]などと呼び、その周辺に、新(分)家を配し、位置によって、[ひがし][にし][みなみ][きたがいと]など、方位によるもの、或は[にゅうや][しんや][あらや][かみ][したて]などと名付けている。この類形は、半ば法則的で、集落構成に共通する大きな要素となっており、周智郡春野町などにも、こうした形態を数多く見ることができる。

水田地帯の屋号には、「○作」「○蔵」「○馬」が多い。と言われた高校の先生がありました。この方は更に、「古来から伝承された水田の面積を、生活の基盤として代々受けついでゆきさえすれば、それでほぼ、年間の生計は安定が得られ、従って将来への保証も、目安としては可能と思われるから、そういう点では山村の懐の深さと、異質な歴史の存在を、屋号が語っていると、言えるかもしれない」と言う意味のことを言われたが、そのような土地柄の村々の内部の地縁的・機能的な結合と、山村のそれとでは、地形的にもかなり隔たりが感じられました。やはり水田地帯では、たとえ、安全であっても、落武者達をつぎつぎと受け容れることは、既成の生産基盤の上にのみ、その生計が成り立っている集落としては、むずかしいことであったかもしれない。

戦後四十年、最近は「温故知新」の芽ばえなどもあって、ご先祖さまの法要も「何百年祭」などという声も聞かれ、併せて郷土史の研究などと共に、従来の日本的なものへの探求も熱心になってまいりました。その中にあって、秘そやかに、昔ながらに、その存在をつつましく主張しつづけていたのが家紋ではないかと思います。平安時代貴族達の衣服の紋様として起こり、やがて時代と共に、その家を象徴する神聖なマークとされ、果ては武家社会に於ては、人命に匹敵するまでに格上げされた。

家紋全体では四千余種と言われております。従って細部の分類は省略させていただきますが、大別すると、植物系・動物系・器物系・天文系・宗教系・幾何学系・武具系・建造物系・文字系・などがあり、その中でまた、それぞれに用途に応じて、表紋(定紋・本紋・正紋)があり、更にその本紋の中にも非公式の場合などに用いた(替紋・裏紋・副紋)などと称する代用のものもあったと言われております。

江戸時代になると、女性専用の「女紋」なるものが現れ、嫁入道具に用いたり、結婚後もそのまま使用して、女子が生まれると、母方の紋を受けつぎ、そのまま定着したと言う。調度品の鏡の裏などにも施されたようです。本来家紋によって、或る程度家系も判ると云います。町内にもかなり多くの種別があって、それを体系づけてゆくには、それだけで膨大な資料が必要であり、とても手がくだせないと思います。今、無作為にその種別の多寡だけを並べてみると、多い方では橘・桔梗・鷹の羽・藤が大半を占め、松・茗荷・梅・菊水・木瓜などが

これに続き、その他小数では菱・沢瀉などがあり、大別すれば80%以上植物系と言えるでしょう。

「お宅は、あなたでなん代目になりますか」と言う問いに対して、四、五代以上の場合には、改めて仏さまを指折り数えることから始める場合が、かなりありました。それが普通ですから、それでいいのでしょうが、一方、相当古い家でも、四代ぐらいから以前のこととなると、全々判らないと言う場合もかなりあって、仏壇の位牌を拝見しても、累代としての編年値からみれば、途中の幾代かが空白になっているものもありました。明治初期、「神仏分離令」の影響によってか、そのころ位牌を沢山焼いたと云う話を、祖父や祖母から聞いている、という家もあり、終戦（太平洋戦争）のころ、まとめて焼いたという家、或は、ごく最近、新しい位牌をつくったが、もともと広い仏壇ではないので、古いものは整理しました、という家、等々そこには、家それぞれの理由によって、古いものの歴史的な亡失がありました。焼きおさめた位牌の法名・没年・年令・俗名など控てない例が多い。どこの家のご先祖も、今の世帯主や家族のことを考えながら、一生懸命、昔の世を生きたはずである。通常の報恩の範囲内で、物故者の記録を残したいものと思いました。

約三百年以上古い仏さまについては、夫婦の位牌で、通常の場合、その多くが、夫が上座で妻が大姉になっており、ややあって、次の時代では、夫が庵主に昇格しても妻は大姉であり、近世中期以降になると、夫が居士になったのに、妻は相も変らず大姉である、と言う例が案外多い。お寺の説明によると「上座と云う位階は文字の示す通り、一番上位とされたから、大昔しは、檀家の中でも、ごく少数の家にだけしか用いられなかったと思う。」と云うことでした。永い時代のなかで、死んでからの、男女間の格差が少しずつ、ずれていった意外な現象が、まともに明記され、その変遷を語っている点で、大変興味深く、なぜ、そうなったのか、その理由など研究課目のひとつであると思いました。

中川根の屋号の分類表

わで(14)　おおや(9)　左右衛門(152)　ろ十郎(107)　太郎(25)
数字(78)　兵衛(52)　神宝神職(9)　太夫(21)　丞(烝)(6)
馬(3)　助(23)　造・蔵(41)　吉(40)　平(48)
作(18)　ほんや(3)　ひがし(12)　みなみ(9)　にし(16)
きた(3)　うえ(8)　した(11)　なか(8)　かいと(10)
にゅうや(10)　しんや(13)　あらや(5)　いんきょ(5)　いたや(9)
こや(12)　かごや(14)　みせ(41)　地名地形(111)　えんぎ言葉(12)
その他(60)　なし(20)

※分類例・左・右衛門＝八左衛門・吉右衛門など、◎太郎＝八太郎・庄太郎など
◎ろ十郎＝要一郎・吉五郎・藤十郎など、◎数字＝貫一・新六・善十など
◎兵衛＝吾兵衛・新兵衛など　◎太夫＝武太夫・作太夫など、
◎丞＝作之丞・源之丞など　◎馬＝太郎馬・次郎馬など、◎その他＝分類のいずれにも属さないもの　◎なし＝旧家で屋号がないもの

私たちは遠い未来の、私たちの子孫にとって、この中川根が、少しでもましな故郷であり、かけがえのない、血縁の風土を感じとることができる場所として、末永く、心のささえとなる土地であれと、希わずにはおられない。そのような意味からも、この屋号調査が、単なる記録に終ることなく、雨の日のつれづれや、秋の夜ながのおりおりに、次代の者たちの人格形成や、情操をはぐくむ媒体の役割を、さりげなく果してゆくことができれば、それ以上の喜びはないように思われます。

五十年後、百年後に、その子孫たちの最も身近かな歴史として、この小冊子が、彼ら自身の手によって、再び、未来の世に甦える可能性がないとはいえない。そのときになって、遠い祖先となった

私たちに、彼らは一体、どんなほほえみを投げかけるのだろうか。この企画には、ふと、そんなことを空想させるものがある。

年と共に減りつづけることはあっても、新しく誕生するものがあるかどうか。いつから始まったのか、判らないほど、長い風雪に耐えながらも、あたたかで、ソフトな感触をもつ屋号と称するひとつの文化に対して、私たちは今、故郷と共に永遠に生き残ってゆくことを、心から念願してやまない次第であります。

＝昭和六十二年三月十五日発行　中川根の屋号より＝

編集　中川根町史研究会　発行　河村計三

編集室より

中川根町史研究会は前身の教育講座を入れると二十有余年になる、生涯学習グループで、町の歴史を中心に、周辺地域を含め、地域史を学習しようとしているグループです。

初代会長は太田二郎さん、次に高畑幸吉さん、河村計三さん、藤田正義さん、相村一雄さんと引き継いでおります。私も三年前迄会員として、様々な勉強に参加させていただきました。『中川根の屋号』は当研究会が発刊した初版本です。河村会長を中心に、会員が心血を注いでつくり上げた冊子です。

平成十七年九月を持って中川根町は長い歴史をとじるのですが、その記念と言う言葉はふさわしくないかも知れませんが、町内十六地区全てに残る屋号を中心に、地区の歴史や、特徴、かつてあった社・寺や施設・言い伝えなど紹介して行きたいと思います。何回シリーズになるでしょうか。ふる里通信創刊当時に企画した"母校は今"シリーズも、十一の小学校、三つの中学、二つの高校、一つの幼稚園とたしか十五回を数えたと思います。次回より各地区の屋号を展開します。故河村会長の残した足跡をたどってまいりますと、新たな発見あり、又、行き詰った事を、別の尺度で導いてくれる不思議な力を感じます。一層頑張って企画したいと思います。

幼き頃のふる里の野原

取手市　藤本都子

六月末、久しぶりに関西に出張した折り、京都で知人に会い、夕食をともにしました。

知人が心当たりの店は、たまたま休みだったので、町を歩きながら探すことにして、蒸し暑いのもかまわずぶらついてみました。祇園のあたりは、最近でこそ一見さんも断らないらしいと聞いているけれど、「かしこまって食べさせていただくこともないよね」と通りを歩いていたら、お座敷着の芸妓さんとすれちがいました。

ひとすじかふたすじ別の路地で、奥へ入る小路がありました。その入口に、お品書きが置かれていて、お値段もそこそこでした。

店の名前は「いたどり」となっていました。

「えっ、あのすかんぽのいたどり？」と、一挙に親しみを感じて「ここにしよ」と決めました。お料理の一品に、「いたどりのあえもの」がでました。子どもの頃、遊びながらの道すがら、ポキンと折り取って、むしゃむしゃ食べたあの記憶の中のいたんどりの味とのギャップに驚きました。料理の仕方と、見せ方で、かくも立派になるものとは。

「土手のすかんぽ　じゃわさらさ」という歌いだしの唱歌がありました。

すかんぽというのが、私たちが慣れ親しんでいた「いたんどり」と同じものを指していることがわかったのは、ずっーと

後になってからでした。

なにせ、道端にも、草むらにもありふれている雑草で、そんなものが歌になるなんて、思いもしませんでした。

春から初夏、まだ若いいたんどりを、節のところでポキンと折って皮をむいて食べたものです。よもぎ摘みにいくときは、新聞紙を切って塩を薬包みにして持っていって、いたんどりにつけて食べました。えぐいような酸っぱさが、塩のおかげで、ほんのサシ中和されたように思えたのです。

すっぱさではカワラグミがいちばんでした。小さくて、白いゴマをふいたようなカワラグミを、近所のこどもたちで誘いあって、よく裏川原に取りに行きました。

学名　アキグミ
（カワラグミのこと）

アルマイトのお弁当箱を持っていって、いっぱいになるまで集めました。でもカワラグミは酸っぱくて、しぶくて、そうそうは食べられたものではありません。お弁当箱いっぱいのグミも、結局は全部食べきれませんでした。

春になると、よもぎ摘みです。春休みには丸一日、遊びがてらに遠くまで足を伸ばしました。なかでも、塩郷の手前のほうき沢に行くのがいちばんの楽しみでした。大井川の流れの向こうに久野脇が見えて、ただ一面の草っ原のほうき沢でした。おしゃべりをしたり、歌を歌ったりしながらの合間に、よもぎを摘んだのですが、なぜか楽しかったのです。

大人は一人もいない、子どもたちだけの世界でした。それでも、危険な目に会ったことはないし、のどかな平和な時間でした。

ヨモギの芽

幼い時は、手当り次第に摘んで、早くびくをいっぱいにすることばかり考えていました。でもそうして摘んだよもぎは、ほかの草や枯葉や、ときには石ころまで混じっていて、かえって手間がかかると母に言われました。大きくなるにつれて、後で始末が簡単なように、摘むときに気をつけるようになったものです。

自分が摘んだよもぎが、お節句の蓬餅のなかに入っていると思うと、なんだか誇らしくて、いっそうおいしく感じました。

（きいちご）
とてもおいしい

学名. ニガイチヨ
（あずきいちご）
食
とても
おいしい
赤色
黄色
←学名 モミジイチゴ

赤色
学名 クサイチゴ
（のいちご）
食

野イチゴも木苺も、甘さより酸っぱさが勝っていたように思います。でも、あの粒だった透き通るような紅色のイチゴ類は、みつけるとうれしくて、摘んでもしばらくは手のひらにおいて眺めて楽しみ、それから口に入れて、プチプチとした食感を味わいました。

へびいちご。
子供のころ、食べると、舌べろがはぜると教えられた
薬品の原料になるという

小さな竜

ほうき沢へは、峠道をこえて山伝いに行くのが、いちばん安全でした。でも小さい子がいないときは、大井川鉄道の線路伝いにいくこともありました。電車の時間を見計らって。　地名のトンネルを抜けて　むこうがわに出ると、少しして短い鉄橋があります。この鉄橋を渡らないとほうき沢に行き着けないから、小さな子には無理でした。

もちろん、線路上を歩くことは、良いことでないと分かっているから、大人たちには秘密にしていました。あるとき、どうしてそうなったのかは覚えていないけど、塩郷側からトンネルに入り、地名へ帰ろうとしていました。一人でした。トンネルに入って半分くらいしたとき、電車の音が聞こえてきました。とっさに駆けても、トンネルの外へ出ることは、できないと思いました。その時、以前、年上の子から何となく聞いていたことを思い出しました。――もし、トンネル内で電車がきた時には、トンネルの壁にぴったりへばりついていれば安全だということを――。

それで必死にトンネルの壁にへばりつきました。とどろくような音を反響させながら、目の前を、前照灯をこうこうと光らせた電車が近づき、通り過ぎていきました。多分、貨物列車だったと思います。圧倒的な、力強いものが来て、去っていきました。

気がつくと、トンネルの中は静かになっていました。残りの半分のトンネルを、駆けるようにして抜けて外へ出たとき、心のそこからホッとしました。

この冒険は、親にはもちろん、親しい友達にも言わないで秘密にしていました。そうして、線路伝いにトンネルを抜けていくということも、しなくなっていました。

今よみがえってくるブミやいたんどりの味は、子どもの頃の懐かしい思い出とともに、本来の味より、少し甘さが加わっているに違いないと思います。

おわり

平成16年度 中川根町ふるさと再発見事業で、昭和29年に旧中川根村役場が作製した『中川根風土記』16㎜フィルムを編集しなおして、DVDに収録されました。併せて、平成16年度を中心に、現在の中川根町の姿も『新中川根風土記』として記録されています。今年9月にて、中川根町名も終ることも踏まえて、町内全戸配付となりました。

50年前の我が町の様子が甦って、懐しいを通りこえ、何とも切ない気持ちになりました。やがて、50年後の未来に、このDVDを見る人がいるのかも……。と、想いを巡らせてみました。現在の小学生は60歳前後になるのですね。

『中川根風土記』の時代への誘い。

今から五十年ほど前、国の施策で町村合併が敢行されようとしているところでした。（昭和の大合併）旧中川根村と旧徳山村の合併も取りざたされはじめた頃です。

中川根風土記も当時の村政・産業・教育・文化を中心にした村の記録を町民に知らせよう、残そうと企画されたようです。

当時の村長は鈴木宗一郎さん、村会議長は栗下栄一さん、企画担当者は金森芳郎さん（いずれも故人）です。

❀村政内容、役場の様子、村議会、農業委員会、民生委員会等

❀産業内容、茶業、茶摘み、茶工場、全国製茶品評会等、林業、長尾川川狩風景、官行造林のこと等

❀教育内容、六つの小学校、中川根中学校の様子、

⊙藤川小、運動会のマスゲーム（上級生）

⊙水川小　学校内の様子、新校舎のこと　など

⊙上長尾小、中川根村公民館、跳び箱、気象観測など

⊙下長尾小　ソフトボール試合　など

⊙久保尾小　校内の様子など

⊙久野脇小　〃

⊙中川根中　朝礼、運動会、女子生徒ダンス　など

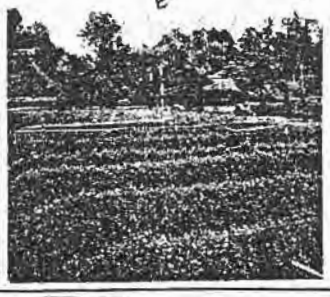
❀文化、久野脇佐沢藥師ひんどり、手操り、中津川その他、

橋・万世橋・崇徳橋・中徳橋・下泉橋・久野脇橋

境川ダム、久野脇発電所

❀災害と復旧、梅島下台風災害後の護岸工事

※昭和二十八年から撮影が始まり、昭和二十九年には映写機ベルを広報活動と視聴覚教育の為に購入、中川根村公民館や各地区、学校、を巡回映写し、好評であったといわれています。



藤川、山元熹さん自慢の茶園で検問九尺、高さ五尺の優良茶園。去る昭和二十六年に県知事より表彰されたもの

全国製茶品評會入賞者発表

傳統を誇る中川根村

三年連続優等賞を獲得

第七回全国製茶品評会は去る十月十六日伊勢神宮遷宮祭で賑わう三重県四日市市で開催されたが、本村より煎茶八七点、かぶせ茶三点がこれに出品され、一昨年、昨年に引続きこゝに再び本村出品茶が優等農林大臣賞を得て三年連続優等賞を獲得、川根銘茶でその名を大きくクローズアップされたのであります。こゝに入賞者の氏名を発表し今後の御奮闘を御祈り申上ます。

学校の生徒数と先生方（昭和28年度）（敬省略）　中川根弘報より

中川根中　前川善一校長・中村唯司教頭・芹沢久雄・小沢英夫・富永シズ・高畑智・太田統一郎・岩瀬正・中島哲・植田剛栄・原田博夫・西村久男・金沢守衛・松井富美子・（事務）藤田勇市　（15名）

藤川小　204人　滝尾実吉校長・谷沢青郎校長代理・鳥本みき・藤田もつ代・田中久子・内藤早春・植田勤・加茂俊作・（8名）

水川小　88人　大村祐一校長・赤堀良香校長代理・小沢とも・義科茂・鈴木喜久子・沢西茂（6名）

上長尾小　292人　海野正策校長・鈴木京平校長代理・森脇初江・長塚久代・高畑淑子・藤田衛・塚合渦稚子・俣野幸男・沢西清澄（9名）

下長尾小　125人　高塚勇校長・石井新治校長代理・鈴木通子・山本澄江・高木良子・宮藤昌治・中村富夫・柳沢利喜雄（8名）

久保尾小　79人　田村清校長・小関殿男校長代理・岩堀しず・片瀬政子・太田昌也（5名）

久野脇小　109人　太田二郎校長・黒田末吉校長代理・山本光江・諸田れん・中村道子・鈴木寿郎（6名）

川根七ヶ村人口状況（昭和29年度）　中川根弘報より

中川根村	6,807人
徳山村	4,914人
上川根村	3,864人
東川根村	3,765人
下川根村	6,523人
笹間村	2,309人
伊久美村	3,407人

※後合併により、本川根町、中川根町・川根町・島田市となる。

中川根村公民館2階より、ステージに向けて、映写している様子。

天然色映画

中川根風土記封切

弘報活動と視聴覚教育の目的を以て導入した映写機ベルの使用と共に村有フィルムの必要から、取敢えず村の概要とも云うべき行政産業教育文化等を網羅した第一集を天然色で收め、後世への語り草にも資する目的で編輯中を強行撮影したが、先頃完成されたので公民館を皮切りに各部落を巡回映写し好評を博している。この撮影は、神岡ニュース社ケナダフィルム氏に委嘱しただけあって平凡なシナリオにも拘らず芸術味豊かなものであった。

中川根村公民館は、昭和27年度に建設され、「社会教育の殿堂」であった。学校や村の数々の催し、成人式・敬老会・音楽発表会・講演会・と様々な角度から利用されていた。特に校内にある上長尾小学校児童は、音楽発表会・映画会等、観賞時間も多くあって、優遇されていました。

賞状

地域文化活動特別賞

中川根ふる里通信様

貴団体は地域に根ざした文化活動に努力され心豊かでいきいきとした景民文化の振興に大きく寄与しています

ここに地域文化活動特別賞を贈り今後一層の活動を期待します

平成十七年二月十二日

財団法人静岡県文化財団

理事長　松井　紘

中川根ふる里通信が、静岡県文化財団より、地域文化活動特別賞をいただきました。

この二十年間、細い糸が行ったり来たりする様な通信のやりとりであったかも知れませんが、読んで下さる皆様の温かな交流があったからこそ、続けてこれたと思っております。読者の皆様、本当にありがとうございました。皆様と共にこの授賞を喜びたいと思います。これからもどうぞよろしくお願いします。

東海地震の事を記事にする約束を前回号で書きましたが、又次回号に繰り越しとなってしまいました。その間に福岡市沖を震源とする地震が起きたり、スマトラ沖では二度目の巨大地震が発生しました。何かと心配になって来るこの頃です。

風土記が作られた昭和二十八年は、私は上長尾小学校三年生でした。(担任高畑汲子先生、五二人学級)当時映画撮影があるという事で、三年学級もモデルになりました。今見てみると、あっという間にすぎてしまいますので、誰が誰だか判りませんが、若い素的な高畑先生、香代子さん、恵美子さんなど、幼ない姿が発見されます。

当時上長尾小学校は、古い建物(講堂・講堂横の平屋校舎、便所、教員室棟など)が取りこわされ、新校舎と、中川根村公民館が新設される、建設ラッシュの時代でした。その敷地は夕宮遺跡(上長尾遺跡)でもあり、過去数回の発掘でも、数々の出土品がありましたが、今回、あの有名な土偶が発掘されました。又、狭い運動場には、子供達が溢れ、休み時間には、ごった返していた事が想い出されます。

中川根村公民館も、私達の時代と共に生きて来たような感がします。北支部(金谷以北)小中学校音楽発表会は、毎年の様に会場となりました。何故か、上小代表には私達の学年が出場し、「歌の町」「野菊」「竹取物語」「母」など歌ったのを記憶しています。五和中のブラスバンド、大井中のコーラスも、素晴らしかった。数々の行事の最後の方に、原軍一県会議長就任祝賀式典がありました。その後、昭和五十余年、取りこわされ、中央小学校、校舎に変わりました。

七十四号が出来上りました。今号に載せられなかった原稿が届いておりますので、さっそく七十五号に取りかかり、四月下旬には、二号同時発送になると思います。「川根の魅力」の冊誌、川根三町の文人の皆さんが心を込めて書いた文集です。「川根はひとつ」共通の自然と、文化を共有しています。よろしかったらお求め下さい。

定期購読のお願い

中川根ふる里通信は有料発行です。

1部　〒共　200円

皆様の定期購読がふる里通信の発行を支えます。年4回の発行の予定ですが、ここ1年発行回数が多くなるかも知れません。

購読料が切れた方には、振替用紙を同封致しますから、引き続き、ご購読いただきたく、お願いします。

もし、購読を止めたい時や、住所変更のおりも是非、ご連絡下さい。

特に合併によって、住所が変った所も多いかと思います。ご一報下さい。

郵便振替通知票番号
000870－4－81556
発行責任者　〒428－0313
静岡県榛原郡中川根町上長尾859－6
小沢節子
TEL　0547－56－0015
FAX　0547－56－0020